

リービ英雄論：越境の重層性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 富鎮, 松浦, 光汰 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027889

リービ英雄論

—越境の重層性—

南 富鎮・松浦光汰

1. はじめに

リービ英雄による一連の創作は日本語文学として認識されているが、その物語の内容が日本語の領域で発生していることは稀である。例えば『千々にくだけで』がカナダでの、『仮の水』が中国での経験を基に生み出されているように、リービ英雄文学は他言語圏に発生する経験を日本語世界に還元する傾向が強い。つまり英語を母語とするリービ英雄がたんに日本語で日本語の世界を描いているのではなく、日本語を日本語から隔離されたもう一つの他言語圏に置くのである。意図的な重層性を図っているようにも思われる。

このような重層性は表記形態のみにおいて観察されるわけではない。リービの作品の主人公は個別の名前を持つこともあるが、近年においては「かれ」として表記される場合も増えている。それぞれは異なった物語の主人公として作中で行動していくが、共通した特徴として、リービ英雄自身が克明に投影されていることが挙げられる。つまりそれぞれは物語の主人公「かれ」であると同時に、リービ英雄自身でもあるのである。明らかにリービ英雄主観の物語であるにも拘らず、三人称視点で描かれるリービ英雄文学は「一人称でありながら三人称」という重層性を帯びていると考えられる。このリービ英雄作品群における共通項である重層性こそが越境行為の本質ではないかというのが本論における趣旨である。

リービ英雄文学の主人公たちがくり返す越境はたんなる位置的な移動ではない。越境はそれに付随して発生する言語あるいは文化的な境界の超越に特に注目して描写されている。主人公の肉体的な移動に精神は追いつくことが出来ず、以前の領域に取り残された感覚は違和感を基にして未知の領域を認識しようとする。そしてこのような目の前の事象と認識の間の小さなズレ（違和感）が堆積して層を成し、その総体がリービ英雄の文学を構成しているのではないだろうか。本稿はこうした点に注目し、作品群全体を捉えなおすことを目標とするものである。

2. 言語の重層性

リービ英雄文学を注意深く観察すると、言語の切り替わりと呼ぶべき現象を見出せる。新作の「西の蔵の声¹」における「とつぜん、胸の中から島国のことばがのどに上がった」や『千々にくだけで²』における「悪を行う者ども、と下手な和訳が頭に響いた」がその一例である。前者はチベット、後者はカナダでのリービ自身の経験が基になっており、当然ほとんどの言語活動はその土地の言葉でなされたはずだが、例外が存在したということだろう。これはつまり、ごく一部を除いた作品における描写のほとんどは執筆言語である日本語ではない異言語によって生成されているにも拘らず、リービは敢えてそれらを日本語に翻訳する過程を通して作品へと昇華しているということになる。リービの母語は英語であり、さらに中国語の素養もあるため、当事者的言語を用いた創作形態をとることも可能であるはずだが、何故日本語へと翻訳して創作しているのだろうか。

¹ リービ英雄「西の蔵の声」（『群像』75巻6号、講談社、2020年6月号）に所収。

² リービ英雄『千々にくだけで』（講談社、2008）

(1) 言語と距離

哲学者のヴァルター・ベンヤミンは翻訳について、「原作の意味におのれを似せる」行為ではなく、むしろ「愛を籠めて微小な細部にいたるまで原作の言い方を翻訳の言語の中に形成」する行為だと述べている³。つまり翻訳とは当事者的言語からさらにもう一つの言語を介して事象を再構成する行為であり、そのためには対象の徹底的な客観化が必要と思われる。リービの場合は主体として経験した事象を客体として再構成する必要があり、結果としてかつて経験した事象とそれを語る言葉の間にかかなりの距離が生じているのではないだろうか。この事象との距離感は、リービ英雄文学のみならず、日本近代文学を語る上でも重要な要素のように思われるのである。

小説家の堀田善衛の「祖国喪失」に「公子の日本語を聞いて杉は自分たちの大きな転機が外国語で運ばれたことに気付き、それが日本語に直されると今更のようにずしりと重い現実感をもって迫って来るのを感じた⁴」という描写がある。杉の母語は日本語であり、たとえ異言語の空間にあってもそれは杉自身の感覚や言語意識の根底に流れ続けている。外国語で聞いた内容が日本語に訳された途端に実感を伴って押し寄せる描写はその証左と言えよう。これを踏まえると母語は主観と強く結びついており、一方で非母語は客観に強く結びついているように思われる。これを基にリービにおける英語及び中国語を従来とは異なった視点で考察することが可能であるかもしれない。

(2) 言語と過去記憶

リービにとって英語は母語である。カリフォルニア州で生まれたリービの脳裏には、たとえ六歳の時に父親の仕事の都合でその地を去ることになったとしても、英語の感覚が刻み込まれている。先論で指摘した言語における音の感覚はその一例であろう⁵。あるいは作中に散見される、亡命作家のユゼフ・ヴィトリンが「言葉の帰還」と呼んだ「既に忘れられ、現在の生活にはもはや使われない言葉が、ひとりでに現在の意識に帰ってくる⁶」現象と類似する描写もその顕著な例と言えるかもしれない⁷。これらを踏まえると英語はリービの感覚と強く結びついていると言えるだろう。

作中における英語の役割は、この知覚の中核を担う媒体のみではない。リービは私小説について「歴史的な感覚抜きには書けない」と述べている⁸。ここで言う歴史とは、その人物が現在に至るまでに積み重ねられた過去のことである。不可変的な過去が堆積し、現在はあくまでもその結果として構築されている。現在と過去が分かち難く密接に関係しているからこそ、現在の私を語る行為に過去の私の感覚が必要不可欠だということだろう。この現在と過去をつなげる結節点としての役割を、英語は担っている可能性がある。

リービ英雄文学には必ずと言っていいほど過去の描写が存在する。そしてそれらの多くは現在のリービが抱く喪失や追い求める物の根源に関連するように描かれている。例えば第一作『星条旗の聞こえない部屋』には次のような描写がある。

老婆のひよわな「Hello」を聞いて、「It's Ben」と答えると、向こうからは沈黙が流れてきた。ウエスト4ストリート駅の薄暗い電話ボックスの中で濁った雨水のように増してくる沈黙に対して、「ジェイコブの息子のベンです、あなたの孫のベンです」というと、がちゃんと電話は切られた。ベンは

³ ヴァルター・ベンヤミン「ボードレール」(『ヴァルター・ベンヤミン著作集6』川村二郎訳、晶文社、1970)に所収。

⁴ 堀田善衛「祖国喪失」『堀田善衛全集1』(筑摩書房、1993)

⁵ 南富鎮・松浦光汰「リービ英雄論—表記と音の越境」(『人文論集』第71号の1、静岡大学人文社会科学部、2020)に所収。

⁶ ユゼフ・ヴィトリン「亡命の栄光と悲惨」(『やっぱり世界は文学でできている—対話で学ぶ〈世界文学〉連続講義2』、沼野充義訳、光文社、2013)

⁷ リービ英雄『模範郷』には台湾の実家があったと思われる場所で突然「I give to you」「and you give to me」という歌詞が脳裏に甦る描写がある。リービ英雄『模範郷』(集英社、2019)

⁸ 座談会「言葉の闘争」(『群像』54巻1号、講談社、1999年1月号)に所収。

十四歳だった

これはユダヤ系血筋から拒絶される場面である。「Hello」「It's Ben」という表記からわかるように、この会話は実際において英語でなされている。リービの父親はユダヤ人であり、母親はポーランド人であった。純血主義が根強く残っていた父方の一族はリービの家族を村八分の状態にしたようだ。一度は和解に成功するものの、その後父親が中国人女性と再婚するとまた同様の状態に陥ったという⁹。このような血筋からの否定はリービのアイデンティティの確立に強く影響を与えただろう。そしてその結果として『ヘンリーたけしレウィツキーの夏の紀行』や『仮の水』といったユダヤのルーツを求める物語が綴られた可能性がある。英語によってなされた自己を構成する血脈からの否定経験が、現在の私として描かれる主人公に大きな影響を与えている。

リービにとっての中国語は「自分の言葉」ではないが「母語」のように聞こえた言語である¹⁰。6歳から10歳までの時期を台湾で過ごしたリービは、「自分の家はどこにあるのか、あるいはどこにあったのか」と聞かれた際にはアメリカではなく台湾の家を思い浮かべるようだ¹¹。小説『模範郷』(2016)における台湾は、理解することの出来ない「大人と子供」の「遠い声とすぐ近くの声」が氾濫しているリービを音声的に拒絶する空間として描かれている。この中国語による音声的な阻害経験が故郷における記憶の原風景として心中に息づき、現在におけるリービに強い影響を与えているように思われる。

リービが中国を描く作品の多くには、主人公が「路地」に興味を示す描写が観察される¹²。路地を中心に物語を展開する作家と言えば中上健次を想起するが、中上の路地が生と死が輪廻し、外部と内部の差異を消滅させる窮極的な同質空間として描かれているのに対し、リービの路地は他者の生活が息づき、自らの外部性が徹底的に提示される窮極的な疎外空間として描かれている。こうした路地における自己の徹底的な隔離作業によって、主人公が周囲に息づく他者の言語空間（中国語）に孤立して存在する状況が発生し、故郷の原風景が再現されるのである。リービ英雄文学の主人公たちは「まだ故郷の面影が残っている」という友人の言によって中国を目指すが、リービが求める面影とは単なる街並みという視覚的な要素のみならず、そこに溢れる中国語の音声的な要素までを内包しているのだろう。リービにとって中国語は故郷を想起させる言語であるものの、それは自らが中国語領域の一部として存在しているからではなく、中国語が言語空間において自己を窮極的な他者として照らし出すからである。こうした疎外によってアイデンティティを確立しようとする試みには明らかに、原風景が関連していると考えられるだろう¹³。

故郷とは移動によって発生するものである。生まれ育った空間を何らかの理由で離れることによって初めて、個体は郷を想うようになる。リービもその例に漏れず、故郷を失ったからこそ「家」を求めているのだろう。この故郷の家を失う瞬間にも中国語は深く関連している。小説『天安門』におけるそれは、彼の父親と中国人女性が不貞を働く場面である。

茶色と白の体毛のある父の太い腕が、かれの目の前で動きだし、すらりとしたミス・ジャオの肩にまわった。ミス・ジャオがわずかに振り返り、「ニージェハイツ你的孩子……」タブミングバイと言いかけた。「他不明白」と父が言った。かれには分からないだろう。

⁹ 対談「喪失を書く文学」（『群像』48巻6号、講談社、1993年6月号）に所収。

¹⁰ 対談「中国、そして現代文学へ」（『群像』61巻8号、2006年8月）

¹¹ リービ英雄「イーラ・フォルモーサー—四十三年ぶりの台湾」（『すばる』28巻3号、2006年3月）

¹² 小説『国民のうた』における「路地は舗装されていないで、泥と氷と砂利の上に子供と鶏が歩いていた」などがその一例である。

¹³ 小説『仮の水』には、タクシーの運転手に「なぜこの町を何度も訪れるのか」と尋ねられた主人公「かれ」が「古い路地が好きだ、路地の奥の、何かを探している、路地の奥の、自分の家を探している」と答える描写がある。

実の父親によって、「かれ」は言語的に突き放されるのである。ある意味では中国語に父親が奪われたと考えることも可能であるかもしれない。自らが内側に参与することを許されない言語領域へと父親が移行してしまう経験は、根源的な喪失として心中に刻み込まれていても不思議ではないだろう。ここでは家族の喪失と言語からの拒否が分かちがたく同時発生している。リービが繰り返し主張する「日本語だけは門前払いを食わせない」という言葉の根底には、かつて中国語に「門前払い」を食わされた経験が存在しているのかもしれない¹⁴。

総じて言えば、英語と中国語はリービの過去における喪失と深く結びついている。こうした言語的喪失感、リービ英雄文学における歴史として現在を生きる主人公に強い影響を与えている。これらに基づいた一連の創作は、言語学者フンボルトが主張した人間精神のもつ「與へられた素材」を「内部から支配」し、「理念に轉化」し、或いは「理念に従属」させる能力の発露であろう¹⁵。これが発生する過程において、当事者的言語ではなく、二次的言語である日本語が創作の手段として選ばれた理由としては、やはり先に述べた言語における主観と客観の問題があるのかもしれない。

詩人のアーサービナードは英語で書こうとした時には「父親と母親の聲がこだまして」そこから発展させることが出来なかったが、日本語を基に捉えなおすと、「言葉に振り回されたり支配」されたりすることなく「記憶を見つめることが出来た」と述べている¹⁶。つまり、主観に強く結びつく母語での創作には、自分あるいは関係者が強く前面に出てしまうという危険性があるのかもしれない。小説家の坂上弘は私小説について、「私」を外側へと「出すようなもの」ではなく、むしろ意識がある限り広がり続ける自己を「カット」するものであると主張している¹⁷。現在形で溢れ続ける自己をそのままに描き留めようとするれば、それは私小説ではなく自伝となってしまうのだろう。リービの喪失経験は一般的なアイデンティティの確立を困難にするほどに強烈なものである一方で、またそれが困難であるという逆説的なアイデンティティの確立を可能とする。私小説創作において喪失経験などを含めた個体の歴史性は必要不可欠の要素であると言えるが、歴史はある瞬間の経験が「世界の言語化¹⁸」によって記録、堆積されたものである。リービにおいてはその言語があまりにも強く喪失と結びついていたため、その経験が発生した当事者的言語での文学創作においては、過去として登場する自己あるいは近親者を作中で操作する際に困難が伴った可能性がある。こうした背景が、リービ英雄文学における言語の重層性に関連しているのかもしれない。

3. 「私」の重層性

先の章では言語表記における重層性に主観・客観が強く関連していると論じたが、これらの影響は言語表記のみならず、文中における人称表現にも深く関係しているように思われる。文章中における人称とはつまり作者の物語に対する視線そのものであるため、一人称表記には主観が強く、三人称表記には客観が強く表れている可能性がある。こうした文章表現における主観・客観の影響を分析しつつ、リービ英雄文学を読み解いていく。

まずはリービ英雄文学の中でも数少ない一人称「僕」が用いられている小説『模範郷』と「千年紀城市に向かって—中国人になったユダヤ人を“探す”旅¹⁹」をその他の三人称表記小説と比較し、人称表現

¹⁴ リービ英雄「日本語の勝利—平成の渡来人」(『中央公論』105巻1号、中央公論新社、1990年1月号)に所収。

¹⁵ フンボルト『言語と人間』(岡田隆平訳、富山房、1941)

¹⁶ 講演「言葉を疑う、言葉でたたかう」(『それでも世界は文学でできている—対話で学ぶ〈世界文学〉連続講義3』光文社、2015)に所収。

¹⁷ 座談会「我々にある志賀的なもの」(『志賀直哉』群像日本の作家9巻、小学館、1991)に所収。

¹⁸ 中井久夫『徴候・記録・外傷』(みすず書房、2004)

¹⁹ リービ英雄「千年紀城市に向かって—中国人になったユダヤ人を“探す”旅」(『中央公論』119巻11号、中央公論社、1887年11月号)に所収。

の差による文学的効果について分析する。小説『模範郷』は2019年に刊行された短編集である。その内容の中心を、故郷を失って以来足を踏み入れずにいた台湾への郷帰りについての内容が担っている。「千年紀城市に向かって—中国人になったユダヤ人を“探す”旅」はリービの中国旅行記であり、この旅での経験は『ヘンリーたけしレウィツキーの夏の紀行』や『仮の水』などのユダヤ的ルーツに深く関連した作品に影響を与えている。先述したがこれらの作品には一人称「僕」が用いられているためか、他の作品に比べ主人公と作者であるリービ英雄との間の距離が限りなく近いように感じられる。例えばリービ英雄の文体として、小説『ヘンリーたけしレウィツキーの夏の紀行』における「ヘンリーの頭の中で、日本語のことばが大きく、こだました。がいじんが、がいじんが、がいじんではなく、なった」をはじめとする、主人公のアイデンティティに深く関連する描写がある。この引用文を見てみると、主語はヘンリーという人物であるが、そのヘンリーの向こう側には彼を動かす作者としてのリービ英雄が見え隠れする。そのために、この文章が文学的に創作されたものであるという感覚を拭い去ることが困難になっている。フィクションとノンフィクションとの境界線が非常に曖昧な状態になっているのである²⁰。

一方で次に引用する『模範郷』におけるアイデンティティに深く関連した文章からは、先に引用したものと大きく異なった印象を受けるように思われる。

ぼくは英語で、五十年前に、hereにいた、と説明した。ぼくのhomeは、台中にあった、と言った。(中略) ぼくの家、その方向すらわからないまま、中年男の顔から、もう一度遠くを見渡し、山の尾根とそれを見ている自分の間に、ズレが生じたような軽いめまいを覚えた。hereにはhereがない

先ほど引用した『ヘンリーたけしレウィツキーの夏の紀行』の文章と大きく異なる点は人称のみであるが、一人称表記で綴られていることで、リービ英雄が物語を動かしているのではなく、リービ英雄自身が物語になったように感じられるのである。主語が「ぼく」になることで、ここでの自らが無意識に選択した言葉がもたらした違和感は、他の誰でもなくリービ英雄が覚えたものであると即座に納得することが出来る。読み手にとっては逆に違和感が生じていないのである。主人公と作者の間の距離がまるで存在していないかのように思われる。短編「千年紀城市に向かって—中国人になったユダヤ人を“探す”旅」にも同様の描写がある。

東洋学ジャーナルによると、「リービ」が「李」になったという。文字を仰ぎながら、ひとりで立ち尽くした。自分のアイデンティティはここにある、という思いは、なかった。Iでもなく、theyでもなく、なった、という日本語がひたすら頭に響いたのである

ここではリービという苗字までが登場し、主人公と作者の関係性は、ほぼ同一人物として描かれている。過去の作品を振り返るエッセイとしての側面も強く持っている文章のため、必ずしも同列に並べて語るべきではないかもしれないが、この一人称表記による文章が、三人称表記による文章よりも説得力を持っているという事実は揺るぎない。これらの文章においては他の作品が持つような写実的な客観性が薄れているものの、他の作品が帯びることのない現実性と主観性を備えているように思われるのである。一人称表記には主観性が強く表れていると主張する根拠としては十分であろう。

ここでリービが多用する「かれ」という人称について考えてみたい。そもそも「かれ」という言葉は三人称の代名詞であり、すでに登場しているはずの固有名詞が用いられた男性を想起させる。しかし「かれ」の具体的な名前は作中に登場していない。小説『ヘンリーたけしレウィツキーの夏の紀行』にお

²⁰ ドイツ文学者の池内紀はこの状態の要因を、一見「私的」な写実性を描きながら、そこに「知的」な虚構を入れていく「事実」をより鮮明に伝えるための方法としての「虚構」に見出している。対談「越境する文学」(『群像』49巻11号、講談社、1994年11月号)に所収。

る主人公の「東京にある私立大学の国際情報学部、外国人講師」という肩書や、『千々にくだけで』における「親が離婚し、再婚する。血がつながり、血がつながらない」という描写などは明らかにリービの経歴と合致する。その作品群全体を文学者の笹沼俊暁が「リービ英雄の物語²¹」と呼ぶほどに作中における主人公の要素とリービ自身が近似しているにも拘らず、それはあくまでも「かれ」なのである²²。この「かれ」は「エドワード」のような名付けられた三人称に比べると、人称代名詞として真に当てはまる人物を暗示している点でほとんど「わたし」と同義のように思われる。当然我々は「かれ」をリービ英雄だと考えるのである。ここでは「かれ」という客体を通してリービ英雄という主体が作中で動いていると錯覚するほど精微に描かれているのである。こうした主観性と客観性を同時に担保する重層的な人称表現が、リービ英雄文学をより一層深化させているのかもしれない。

4. 文学における主観と客観

先ほどの分析に加え、『模範郷』のさらに注目すべき点として参考文献一覧が付記されていることが挙げられる。リービは以前から作中に引用を用いることがあったが、『模範郷』において自身の著作を含め、数行に亘る文章を何度も引用したことは非常に珍しいように思われる。さらにはまるで論文を書いているかのように、参考文献一覧まで付記している。小説『国民のうた』において阿部公房「赤い繭²³」の文章を複数回引用した際には特に引用元などは明示されていなかったが、何故『模範郷』においてはそれがなされていたのであろうか。

これには一人称表記によって薄められた客観性を、自らが過去に書いた文章や他者の文章を用いて補強しようとする意図があるのかもしれない。このように文中に意図的な外部を設置し、そこから文章全体に客観性をもたらそうとする創作形態は、必ずしも珍しいわけではない。田山花袋の「重右衛門の最後²⁴」はその一例であろう。この作品は「なにがしという男」が語る「獵夫手記の中にでもありそうな人物」についての話を主人公が綴るという形式で展開する。つまり読み手は語り手と作者が完全に分離しているという前提条件を意識して物語を読み進めることになる。このように作者とは別の個体としての語り手を意図的に設置することで、花袋はこの作品に三人称的人物による物語という属性を帯びさせているのである。

このような意図的な形での客観性の担保はなぜ行われるのだろうか。それについては次に挙げる坪内逍遙の主張に詳しい。

小説中の人物を作るに當りて最も注意を要すべき事は、作者の性質を掩ひ藏して之を人物の舉動の上に見えしめざるやうする事なり。自己の性質を材料として假空の人物を作らむとすれば、自然におなじ質の人物のみ幾人となき出来るゆゑ、其物語の趣さへ終にはうそらしう思はるれば、讀人もまた興を失ひ、かの夢幻界に遊ぶが如き佳境を覺ゆること能はざるべし²⁵

要約すると、小説に登場する人物の要素に自己の性質を明瞭な形で加えることは、結果として小説群全体における人物像の類似化を招き、読者を辟易させる可能性があるということだろう。この自己の性質とは作者の経歴や思想などを示すと思われる。これらが文章において過度に顕在してしまうことを防

²¹ 笹沼俊暁『リービ英雄—〈鄙〉の言葉としての日本語』（論創社、2011）

²² 文芸評論家の結秀実は、敢えて「かれ」で「押し通す」ことで「ある種の吃音性」を表現し、それによって「変だと思わせながら」読ませようとする意図があるのではないかと分析している。書評「リービ英雄「満州エクスプレス」」（『群像』51巻12号、講談社、1996年12月号）に所収。

²³ 阿部公房「赤い繭」（『砂の女・密会』新潮現代文学33巻、新潮社、1978）に所収。

²⁴ 田山花袋『蒲団・重右衛門の最後』（新潮社、1952）

²⁵ 坪内逍遙『小説神髓』（岩波書店、1936）

ぐべきだと逍遙は主張している。確かに各小説における主人公に類似の傾向が見られる場合、物語における選択や結末などが類似化する可能性があるだろう。物語の幅を広げようとした場合、小説の要素に自己の性質を加え、主観性を高めることはその障害となり得るのかもしれない。このような問題が想定された結果として、客観性の担保を目的とした文章中に外部性を挿入する創作形態が確立された可能性があるだろう。

しかし一方で、文章中に主観に基づく内部性を挿入している作品も存在する。武田泰淳の「ひかりごけ²⁶」がその一例として挙げられるだろう。この作品の特徴は前半と後半の形式が大きく異なる点にある。前半は主人公による羅臼訪問の様子が描かれている部分と、Sという人物によるかつてその地で発生した事件についての記述が、後半はそれを基にした戯曲が構成している。その地で発生した事件とは、真冬に難破した船の船長が、飢餓に苦しむ遭難生活の中で部下である船員の肉を食らうことで生き延びたというものである。

この作品の注目すべき点として、主人公による記述とS君による記述、戯曲において、その船長に対する感情の度合いが全く異なる点が挙げられる。例えば主人公による記述において船長は、校長に「凄い奴ですよ」とまるで「同じ下宿の友人」が「とんでもない失敗をしでかした」のを「冗談交じり」で「批評」するような無邪気な口調で語られている。しかしS君による記述において船長は、S君による「恐ろしい想像」の中で、やむにやまれずではなく意図的に船員を殺して食べていたのではないかと推理されている。S君はその事件の当時に生きていたわけではない。彼は主人公と同年代に生きる若者であり、その「恐ろしい想像」はあくまでも「羅臼村郷土史」を編纂するうえで、当時の資料から抜き出した因果関係の明瞭でない事実同士を自分なりの論理で繋げたものである。つまりこの解釈にはS君の主観が色濃く反映されているのである。そしてこのS君の「恐ろしい想像」を基にして作られた後半の戯曲の第一幕において船長は、残忍かつ狡猾な存在として描かれている。主人公の記述においてはあくまでも伝聞的な事実であったこの事件は、S君による詳細な事実の羅列とそれらの主観的意味付けによって、既に完了している静的な「事実」としての属性を脱し、「戯曲」という動的な物語内物語として再構成されているように思われる。

森鷗外が「おのれに愁の心ありて秋の哀を知り、前に其心楽しくして春の花鳥を楽しと見るのみ²⁷」と述べているように、目の前の事実に意味を付与して解釈するのは人間の主観である。S君は事件を構成する客観的な事実の中から可能性として、悪意に満ちた船長を解釈したのである。そしてその解釈は、船長が行った可能性のある行動や言動を想起させる。事実が物語として動き出すのである。これを見るに、客観的な事実を主観的な意味付なしに物語として動かすことは非常に困難なのではないだろうか。つまり、物語を描くうえでは客観性だけでなく、主観性も重要な要素と考えられる。

文章表現における客観性、主観性についての議論は二葉亭の「浮雲²⁸」よりも以前からなされてきた。例えば翻訳家の森田思軒は客観性が担保される三人称表記と、主観性に基づく一人称表記の特性を比較し、次のように述べている。

尋常の記述躰が衆景衆情を一時に寫すの妙を具するにも拘わらず、表裏幽明を一齋に描くの妙を具するにも拘わらず、一人物か某の場合、某の境遇に立ちし時の感情有様を刻畫して切實易ゆ可らず。讀む者恍然神馳せて現に之を目睹する如き想あらしむるの妙は、自叙躰獨壇の處にして、記述躰の企及し難き所なり²⁹

²⁶ 武田泰淳「ひかりごけ」(『武田泰淳集』、新潮社、1973)に所収。

²⁷ 森鷗外「早稲田文学の没理想」(『森鷗外集』明治文学全集27、筑摩書房、1965)に所収。

²⁸ 二葉亭四迷「浮雲」(『浮雲・あいびき』ほるぷ出版、1984)に所収。

²⁹ 森田思軒「小説の自叙躰記述躰」(『国民之友』第8號、民友社、1887)に所収。

言い換えると、三人称表記はあらゆる風景や状況の全体を俯瞰して描くことを可能とする一方で、一人称表記は登場人物などの物語の一部を通して見る風景や状況に感情を用いた意味付けをすることが可能だということだろう。読者はそのような主観的な意味付けに従って物語を解釈し、「恍然神馳せて現に之を目睹する如き想」を得るのだろう。逍遙が主張するように、三人称表記を多用することで物語の類似化が避けられてとしても、それが単なる客観的事実の羅列と化した場合、それを文学と呼べるのだろうか。作者自身の持つ要素を全く持たない主人公を、自然に物語の中で動かすことは可能なのだろうか。二葉亭四迷の「浮雲」が未完成のまま放棄されたのは、内海文三と四迷との間の距離があまりにも遠かったからなのかもしれない。いずれにせよ、文学創作において主観性と客観性は共に担保されなければならない要素の可能性がある³⁰。つまり全体的でありながら部分的、客体的でありながら主体的であることが求められる私小説の理想の形は、主観でありながら客観という「重層性」に満ちたものであるのかもしれない。

5. 越境の重層性

以上の2章において、リービ英雄文学の特徴である重層性を方法論的に分析してきたが、その文体は必ずしも文学創作のために生み出されたものではないかもしれない。それは越境行為自体が結果として主観と客観が入り混じった重層的な思考方法を越境者に強いるからである。越境者の内部には、生まれ育った環境に溢れる「外的な言語」が「内面化」された事物の認識や思考の基となる「内なる言語」がすでに構築されている³¹。これがいわゆる母語である。個体はこの母語を基に世界を認識していくが、越境者がその瞬間に存在している空間は、母語とは異なる言語が構築する世界である。その世界で生活する限り、越境者は異言語で自らを表現することを強いられる。しかし個体にとっての外国語は外の世界の価値判断基準に支配されたものであり、母語を纏った自己の存在を外国語に転化するためには、客観的に自己を俯瞰し翻訳する必要がある。つまり異郷において越境者は、主観を客観に転化するという過程を経なければ自己存在を主張することが許されないのである。こうした自己の出自に関わる特殊な経験が、リービ英雄文学の根底に流れているという想定は十分可能であろう³²。批評家の加藤周一は「文学者」が「特殊な具体的な体験」から出発すると強調し、その「特殊なもの」を「その特殊性に即して追求しながら、普遍的なものまで高めること」が「文学の方法」であり、「文学に固有の方法」であると主張している³³。自己の特殊な経験である主観と客観の入り混じった認識過程に由来する可能性があるリービの文体は、まさに「文学に固有の方法」として文学作品を生み出しているのかもしれない。

6. おわりに

リービが描く越境行為の本質は、それ自体による位置的な変化ではない。むしろその行為が結果的にもたらす主観と客観の重層化に重点を置き、リービは文学を創作しているように思われる。たとえば日本語を母語としないにも拘らず、他言語世界をあえて日本語によって表現しようとする創作形態はその

³⁰ 主観でありながら客観というのは矛盾しているように思われるが、評論家の福田恆存が「小説はあらゆる対立をうちにふくみ、しかもその対立にすら拘泥しない、このうへない自由な形式を展開し始めた」と述べているように、小説においての矛盾は必ずしも否定されるべきものではないと考えられる。福田恆存『福田恆存評論集』(第十四巻、麗澤大学出版会、2010)

³¹ 特別対談「日本語で書くことの意味」(『群像』42巻9号、講談社、1988年9月号)に所収。

³² 文芸評論家の富岡幸一郎はリービ英雄文学について、「言葉が自分にとって自然なもの自明なものとしてある」と思い込んでいる「幻想」を「はぎ取って」おり、それによって単なる「異文化体験」や「国際化」ではなく、まさに「切れば血が出るような存在」、「身体的な緊張にみちた言葉の体験」が生じていると述べている。創作合評「リービ英雄「天安門」」(『群像』51巻2号、講談社、1996年2月号)に所収。

³³ 加藤周一『文学とは何か』(角川書店、1971)

一例と言えるかもしれない。カナダや中国を日本語によって描く翻訳的な創作形態は、当事者の言語をもう一つの言語の中に再構成する試みであり、その際には対象の徹底的な客観化が必要となる。つまりこの創作形態は必然的に強い客観性を帯びるのである。さらに注目すべき点として、英語や中国語といった作中の言語空間を構成する主要言語がリービ自身の過去に強く関係していることが挙げられる。私小説創作に必要不可欠な個体が持つ歴史性は、リービの場合一族と家族の喪失であり、それらの核は英語と中国語によって編まれた記憶である。このような過去が堆積され、結果として生み出す現在を描く私小説はその性質上、自己の主観と強く結びつきやすく、登場人物を作中で操作する際に困難が生じ得る可能性がある。こうした想定を踏まえたうえで、リービ英雄文学は日本語によって綴られたのかもしれない。

以上に加え、リービ英雄文学における人称についても同様に主観と客観の重層化がなされているように思われる。リービが多用する人称「かれ」は、代名詞としてすでに認知されているはずの人物（リービ英雄）を想起させる一方で、決して明確にその対象を示すことはない。作中の描写が明らかにリービ英雄を示しているとしても、それは「かれ」という窮極的にリービ英雄に肉薄する人物として処理されるのである。こうした主観と客観の境界の液状化を発生させる人称表現もまた重層的だと考えられる。

このような創作形態における重層性は、従来からなされてきた文学創作の主体についての議論を踏まえると、画期的な創作方法と主張することが出来るかもしれない。しかしこうした重層性は必ずしも文学創作のために生み出されたものではない。リービが現在進行形で為している越境行為は、常に母語によって認識された主体としての世界の客観化をリービ自身に迫っている。こうした幼少期からの環境的要因が、リービ固有の方法として文章全体に表れている可能性がある。しかし少なくともリービ英雄文学を読み解くうえで、こうした重層性が重要な要素であることは間違いない。

[付記] 本論は松浦光汰氏の卒業論文の一部をなすもので、南はその指導に当たった。